

『わたしを見つめるわたし』

酒井一途

哲学という言葉でまっさきに思いだすもの。大学三年から四年にかけて同じ講義を受講していた哲学科のKくん。ひどく落ち込んでいたとき、彼にかけられた言葉をおぼえている。「僕たちが日ごろどんな生き方をしようとも、どんな苦しみのさなかにあるうとも、奥底の深いところでただしずかに、ありつづけることのできる存在がある。だから、大丈夫」。以来ずっとこの言葉に生かされてきた。彼が日ごろどんな生き方を、何を考えていたのかはあまりよく知らない。卒業してからもう長らく会っていないけれど、彼は今日も元気にやっているだろうか。

*

わたしを見つめるわたしがいる。そして、わたしを見つめるあなたがいる。
あなたが見つめるわたしを、あなたの目をとおして見つめるわたしがいる。

わたしとはなにか。わたしを見つめ、あなたを見つめることで知っていく。

*

わたしとはなにか。思えば、そこから「哲学する」ということをしはじめたような気がいたします。

自意識のめっぼう強い子どもでした。

新宿から西に一時間ほど離れた東京の郊外で、父母にとっての一人息子として、祖父母にとっての初孫として、叔父母にとっての初甥として、生まれ育ちました。どこへいっても、なにをせずとも、ただそこにいれば周囲の人びとに愛され、可愛がられました。そして、そのことがごく当たり前の日常である、という環境のもとに幼少期をすごしました。

違和感を抱きはじめてのはいつのことだったか。母曰く、幼いころは誰とでもすぐに打ち解ける子だったということですが、その話を信じるならば物心ついた前後にもまだ、周囲とみずからの区別がない楽園で戯れている心地だったのかもしれませんが。人を疑うことを知りませんでした。みずからを疑うことを知りませんでした。しかし徐々に、周り折りあいがつかなくなっていきました。

発端のひとつは、じぶんの話をしたがる人に煙たがられるらしい、ということに気づいたときでした。場に持ちだされた話題に対して、じぶんはどうかということを一いち共有しようとしたのです。人に対して意見の主張をするというよりは、世界を鏡にしてみずからを映しだし、その鏡面に映るじぶんをもの珍しく感じて語りたがる、といったような風でした。ナルキッソスが水面に映るみずからを自分自身と知らなかったように、そのような自意識を自意識とも感じておりませんでした。どこまでも無自覚だったのです。

無自覚は鈍感さを生じさせました。何が起きているかに気づかないから、おおくのことに鈍くいられた時期がありました。やがて来る自覚は繊細さを生じさせました。そして、何が起きているかに気づいたとき、おおくのこゝろを感受する時期が訪れたのです。

僕は口を閉ざし、人の話を聴きはじめるようになりました。すると意外にも人は好んでじぶんの話をしたがるものなのだとわかってきました。話したい人がいるなら聴こうと思い、また人がする話に好奇心も抱きはじめ、もっぱらそれからも聴き手に回るようになりました。人がみずからをどのように語るのかを聴きながら、この世界にはじぶんとは異なるいろんな人が生きているのだということが、次第にわかっていきました。一方で、行き場のない自意識は文章を書くことに向かい、誰の目につくわけでもないじぶんの話をひたすら書き留める数年間が続きました。こうしてようやく、自他の境界を意識しはじめるようになりました。

*

「触れてみるといい、いろんなものに……」と、詩人の吉増剛造さんに言葉をもらったのは夏、Kさんと出会った翌夏。見つめたり、話を聴いたりするようになって、その次に「触れる」という課題があらわれたのはまさしく天啓のようで。

自他を意識しはじめたことでかえってその境界線を警戒するようになっていたそのころ、じぶんがほかの何かに触れにゆくことは、ものすごくむずかしいことだった。なぜなら「触れる」ということは、じぶんがそのものに触れるだけでなく、そのものにじぶんが「触れられる」ことでもあるから。

じぶんがほかの何かに触れられる、ことがこわかった。ようやく作った自他の境界をこえられる、ことがこわかった。周囲とみずからの区別がない、かの樂園にはもう戻ることができないから。もはやみずからで境界を作りだしていた。そうすることでじぶんを守っていた。ちいさな世界に、ちいさなじぶんを閉じこめて。なんだか、じぶんがどうしようもない人間のように思っていた。触れてみる、どころではなかった。

じぶん消え去れとつよく願うじぶんがいた。
あなたのなかにじぶんを見つめ、
世界のなかにじぶんを見つめ、
じぶんに飽きたりてなおじぶんのことばかり考えていた。

結局、青年期においても自意識は強いままだったのだ。

*

つまるところ、わたしとはなにか、を考えすぎたのかもしれませんが。じぶんの重みに苦しみつづける数年間がつづきました。じぶんを手放すことができず、じりじりと押しつぶされそうになっていきました。わたしがわたしを手放せばいいのだと、頭でわかってはいても、その方法がわかりませんでした。そんなとき光明のようにして、ヒンドゥー研究者であり日本近代思想にも詳しい中島岳志さんの言葉にであいました。

「器としての自己」を受け入れると、「わたしであることの執着」から解き放たれます。わたしは一つの現象です。そして、わたしは常に可変的な存在です。

わたしという存在にとって最大の欲望は「わたしであること」です。自分探しとは、肥大化した欲望なのです。そして、わたしがわたしを所有していると思っている。これが大きな間違いです。わたしが命を所有しているのではなくて、命がわたしを所有している。この関係を間違えてはいけません。

(中島岳志・若松英輔『現代の超克』)

この言葉を読んだとき、じぶんを消し去りたいという思いは、同じ言葉のままでもまったくことなる意味をもつようになりました。器になろう、と思いました。同時に、「触れてみる」という言葉の、たしかの意味がわかったのです。

わたしが触れるとき、わたしはわたしのことを考えていません。触れるそのもののことを考えています。わたしが見つめるとき、わたしはわたしのことを考えていません。見つめるそのもののことを考えています。わたしがだれかの話を聴くとき、わたしはわたしのことを考えていません。話をしているそのひとのことを考えています。

わたしは、わたしではないもののことを考えているときに、じぶんが消え去っていることに気づきました。わたしはわたしのことを考えなくてもよいのだと知りました。すると途端に肩の荷がおりたように、あるいはそう、憑き物がおちたように、あらゆることが楽になりました。

いったいいままで何にとらわれつづけてきたのか、なぜそうまでじぶんを苦しめてきたのか。知らぬ間にわたしとはなにか、という呪文に縛られて、わたし、という憑き物がついていたばかりに、とんだ遠まわりをしていたのです。

おそらく、すべてが必要なことだったのでしょう。消え去りたかったあのころも、苦しみを苦しみつづけていたあのころも、そのすべてが。

どこへ向かっての遠まわりだったか。人生はまだつづいているから、つづいていくから、わかりません。ただひとつ。必要な過程のうちにみずからが生きていることは、どうやら渦中においては気づけないものらしい、ということがわかってきました。だからこれでよいのかもしれない。ともかくも必要な過程のうちに生きている、と信じていることができるならば、それで。すべてよし、なのかもしれません。

*

Kくんとのお話。とある対談を聞いた後のこと。

「『消え去る行為』っていいね」

「消え去りたいよね」

「それがむずかしい。消え去れない。自分が強すぎてね」

「俺もそうや。消え去れたら悟るってことだから」

「どうしたらいいんだろねえ」

「でも知っとるだけで大分ちがうよ」

「うん」

*

いま書いているこの文章を書くために、四年以上前のメモをひっぱり出してきたら、Kくんとこんな会話をしていたことを知った。当時のメモに書き残されていた。ずっと忘れていた。「知っとるだけで大分ちがう」ということを、Kくんは教えてくれていたのだ。たとえじぶんが「消え去る」ことの意味がまだわからず、「消え去る行為」ができなくとも、「消え去る」とはいったいなんなのか、それがいったいどういうことなのか、考える態度があればそれだけで違うのだ、ということ。そのことを頭の片隅においておくだけでも大分ちがうのだ、ということ。

なぜなら、考えておけば遠まわりしてもかならずそこへ帰ってくるができるから。いままでのじぶんが必要な過程のうちにいたと気づくことができるから。ずっと頭のなかにあったものがなんなのか、それがいったいどういうことだったのか、より深いところで理解することができるから。

生きれば生きるほど、あまたの言葉がわたしに去来する。ときに書物の一言に目がとまり、ときに意図せず街頭で耳に聞こえ、ときにみずからで心に思い、ときに思わず口ばしり、ときに忘れていた記憶とともに脳裏によみがえり、ときになにげなく聴いていた曲の歌詞が耳に残り、ときに周囲にいるだれかからいわれ（必要な言葉はいつだって、ほかの者の口を通してわたしにやってくる）。

言葉はわたしに留まり、また過ぎ去りゆく。言葉たちは容赦がなく、わたしが「それ」を理解しようがしまいが、お構いなしにわたしを振りまわす。あるいはみずからが生きる過程のなかで、「それ」が「そういうもの」ではなかったと知っていく、こともあるかもしれない。じぶんを消し去りたいという思いが、かつては別の意味をもっていたように。そういう誤読や誤謬が生じえることも含めて、知っておこうとするには価値がある。苦しみながらも、「わたしとはなにか」を考えつづけてきたことには価値がある。

これが「哲学する」ことだといえるのかどうかかわからない、けれど、この営みにはする価値がある。

いまでもまだ「消え去る行為」ができているとは思っていない。でも「器としての自己」になろうとしている、「わたしであることの執着」から解き放たれようとしている、すくなくともその過程にはあると思っている。「それ」が「そういうもの」だと頭の片隅におき、考える態度をもちつづけたままで、すこしずつすこしずつ理解していくことができる。

「シンプルなことなのよ。目の前に起きていることから目を逸らさないこと。目の前に起きていることに対して、『私』なんていうものを取り払って、静かに、あらんかぎりの最善を尽くして生きていくという、それだけのことなのよ」——かつて、親しい距離にいたCさんからいわれたこの言葉も、いまでは、その意味が、以前よりもずっとよくわかる。

言葉を知ったら、見つめて、聴いて、触れてみる。やってみればいい。むずかしいことじゃない。「この営み」そのものはむずかしくない。いつだって、いつからだって、はじめられる。わたしは、いまここに身体をもっていて、たしかに生きていて、たしかにどこかへと向かってゆく過程の、さなかに在るのだから。